“笛吹きさん　ネズミを退治してね”
６歳児　山口県

幼年美術

609

2020　　４月号

発行所　大阪府東大阪市長田中４丁目６－３
ぺんてる(株)大阪支社内
全国幼年美術の会　〒577-0013　☎(06)6747-1601
発行人　大橋　功
年間購読料　3,000円　１部300円（送料込み）

第50回 世界児童画展 作品より

“お菓子の国へようこそ”
３歳児　山形県

“らいおん”
４歳児　大阪府

巻頭言　子どもの絵はライブ配信！

先日、３歳児の「絵の具を使って好きなものを描こう」という実践を拝見しました。

子どもたちが絵の具を使うことにワクワクしていた中で、私はある男児と担任の先生とのやり取りに注目しました。その先生は、デジタルカメラを用意していました。活動が始まると、その男児は黄色の絵の具を使って画面いっぱいに描きました。画面右側に向かって尖っているように描き、男児は先生と目が合うと「ドクターイエローだよ！」と言いながら、黄色で描いた中央に青い線を入れました。そこで先生は写真を撮ります。すると男児は、パレットで黄色と青色の絵の具を混ぜ、「ビューーン！」と言いながら上から下まで緑色で横線を何本も描きます。また先生は写真を撮ります。さらに男児は、そのパレットの色に赤色を混ぜ、暗灰色となった色を使って「トンネルに入ります！」と言いながら画面一杯に塗りたくります。あっという間に全面が暗灰色になりました。また先生は写真を撮りました。

担任の先生は、その男児の作品がいつも画面一色になり、何が描いてあるのかがわからないことに疑問を持っていましたが、その子の満足そうな顔を見ると止めることはできなかったそうです。しかしある時、男児の描く絵は画面で物語が展開しているということに気付いてからは、いつも写真を撮りその過程を展示しているそうです。

結果だけみると、１色だけ塗りたくっている絵にみえても、そこにはその子なりの物語が展開されているのです。まさに子どもの絵はライブ配信ですね。

全国幼年美術の会 監事　矢野　真

未来の保育者育成のために

東北幼年美術の会
相馬　亮
（尚絅学院大学）

私は、宮城県名取市にある尚絅学院大学（しょうけいがくいんだいがく）の教員として、将来保育者・小学校の教員を目指す学生たちに、造形教育・図画工作科教育を指導しています。本学科では、ひと学年、約九〇名の学生が在籍しており、将来の夢実現のために、日々努力を重ねています。

さて、今回は、そんな未来の保育者を育てるために、私が指導者としてどのようなことを大切にし、どのようなねらいをもって、学生たちの指導にあたっているのかについてお話したいと思います。

○大切にしていること

私が指導を行う上で、最も大切にしていることは「感性の豊かな保育者を育てる」ということです。

「感性」が人間性の源であるということは、多くの人が理解していることだと思いますが、では「感性」という言葉の意味を説明できる人はどれほどいるでしょう。保育所や幼稚園のホームページを拝見すると、ほとんどの園で、保育・教育方針の中に「感性」という言葉が記載してあります。私のゼミ生が以前「感性」について研究を行った際、各園が「感性」という言葉をどのように捉えているかアンケート調査を実施しました。その結果、大枠で見ればどの園も同じような内容でしたが、いずれも抽象的でぼんやりとした回答ばかりでした。

私は、「感性」とは、「良さや美しさを感じ取る働き」であると、学生たちに伝えています。授業の合間を見ては「感性ってどんな意味？」と質問をし、全員が確実に覚えられるまで指導しています。それは、保育者として、絶対に覚えておいてほしい言葉だからです。

一般的に「感性」とは、身につけるべき力のようなものであると理解されがちですが、私は働きと定義しています。わかりやすく例えるならアンテナのようなものと考えれば良いでしょう。つまり、「感性」とは「自分の身の回りにあるものの良さや美しさを感じ取るアンテナ」であるということです。「感性」というアンテナをより高くすることこそ、私が学生たちに求めていることです。

では、なぜ保育者は、感性を豊かにする必要があるのでしょうか。このことについて少し触れてみたいと思います。

例えば、今、みなさんの目の前に「ある風景」があるとします。風景には、連なった家々があり、塀が建てられ、道路脇には歩道があり、木々が植えられています。雨上りのせいか、人が歩く姿もまばらです。さて、今この風景を沢山の人々が同じ視点から見ているとします。なんの変哲もない、日常的な風景のように見えますが、感性が豊かであると、同じ風景を見ていても、より多くの良さや美しさに気づくことができます。雨上りの水たまりに映った青々とした空、瑞々しい葉に落ちた雨の雫に太陽の光がキラキラと反射しています。感性が豊かであるということは、私達が生きる世界のたくさんの良さや美しさに気づくことができる、ということです。感性が豊かではないと、見えないものがあると私は考えています。

では、なぜ保育者には豊かな感性が必要なのでしょうか。

○豊かな感性をもった保育者とは

子どもがプールで遊んだあと、まだ濡れた足でコンクリートの犬走りを歩いています。ペタペタと音を立てながら歩いた後には、子どもたちの足跡でいっぱいです。あるひとりの子どもが、不思議そうにその足跡を見ています。カンカン照りのお日様のせいで、あっという間に消えゆく足跡をとても不思議そうに、でもじっと見入っているのです。

昼食の時間。子どもたちが持参したお茶のコップが並んでいます。先生がお茶の準備をしている間、ひとりの子どもが、お茶のコップを並べ替えて遊んでいます。何気なく並べているようですが、よく見てみると、背の高い順に並べ替えたり、同じ色同士を集めたりしています。

さて、ここにご紹介した子どもの姿は、何も特別な姿ではありません。きっとたくさんの子どもたちが、日々の生活の中で繰り返している姿です。何気なく見過ごしてしまいそうな姿ですが、豊かな感性を持っていればこそ、こういった子どもたちの素晴らしい姿に気づくことができるようになります。子どもが見ているもの、つぶやいている言葉、試みていること、伝えたいこと、つまずいていることなどにしっかりと気づき、理解してあげることができるのです。

また、こういった子どもたちの姿は、造形表現へとつながることを意

識することも大切です。先に上げた二つの例から考えてみると、コンクリートについた足跡は、「足」という版で、「コンクリート」という支持体へと転写する活動、つまり、版画の原点であると考えられます。これを起点にして、指や手足、野菜などを活用したスタンピング、紙版画等へと発展させることが可能でしょう。コップを並べる活動は、造形あそびへとつなげることができます。周辺材を活用し、子どもたちが自由にのびのびと活動できる環境構成を整えることが大切でしょう。感性豊かな保育者こそが、感性豊かな子どもを育成することができるのです。

レイチェル・カーソンは、著『センス・オブ・ワンダー』の中で次のように語っています。

※美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたびよびさまされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。

「感性」が豊かであればあるほど、その感情は高まり、学ぶ意欲へとつながるのではないでしょうか。

○感性を豊かにするためには

それでは、感性豊かな保育者となるためには、何が必要なのでしょうか。

「感性」は、教えて育つものではありません。一定の体験によってしか得られないものです。しかし、現代社会に生きる学生たちは、常に「快適便利な生活」が身近であるが故に、本来「人」として経験すべき体験が不十分であるという状況は否めません。

感性豊かな保育者になるために、私が学生たちに伝えている三つの約束があります。

①保育の基本をふまえて、幼児の造形を考えること
②造形活動の指導のために、専門的な知識や技能を身につけること
③保育者自身が感性を磨き、創造的活動への関心を高めること

①、②に関しては、私が授業の中で学生たちに教え、伝えることですから、その責任は重大です。しかし、③に関しては、学生たちの主体的な体験が必要となります。これは、大学内での四年間の体験だけでなく、学外での体験が特に重要です。体験と言っても、「勉学」に限られたことではなく、むしろ「遊び」の中にあると考えています。「美術」に触れるために、美術館へ足を運んでもらいたいという思いはありますが、そうでなくとも、映画を見る、好きな音楽を聴く、人と会って話をするだけでもいいし、友人とショッピングや旅行に行くのもいい。もちろん、豊かな体験を得るには、自然は絶好の場所となります。しかし、場所が大切なのではなく、その遊びの中で、どれだけ「心に残る体験」をしたかが大切なのです。心に残ったことは、やがて様々な形で表現され、他者と共有し、重ね合わせて行くことで、また新たな視点や気づきを意識できるようになり、その繰り返しが、自己の「感性」をより豊かなものにしてくれるのです。

大学四年間という、限られた時間の中で、どれだけ多くの「心に残る体験」をするか、常にこのことを心に留めておいて欲しいと、学生たちには伝えています。私の一番のおすすめは、「海外旅行」です。できれば、添乗員が同行するツアー旅行ではなく、自分たちで計画した旅行を勧めています。人種、言語、文化、歴史等、自分が生まれ育った日本とは全く異なった環境の中に自分をおくことは、自分を丸裸にされたような感覚になります。その中で、自分たちだけの力だけで様々な場所を訪れ、人々に出会い、文化や歴史に触れることは、心揺さぶられる感動を味わう絶好の機会となるはずです。お金の問題や治安の問題等ありますが、時間に余裕のある学生のうちに、ぜひとも一度は海外を旅して欲しいものです。

○最後に

保育者は、子どもの瞬間的な感動や気づきを心に留め、意識化していくような援助をすることが必要です。ただ子どもたちの側にいるのではなく、いつも心を感じていなければなりません。そうすると、今、何をすればよいのかがわかるようになってきます。そのために、保育者を目指す学生たちは、様々な体験を通して、自己の「感性」を豊かにしてゆく必要があるのです。

そしてそれは、学生たちに限ったことではなく、我々にとってもとても大切なことだと思います。豊かな「感性」を育むために、子どもに負けないぐらい遊びを楽しむことのできる大人でありたいと、いつも考えています。

※【引用文献】
レイチェル・カーソン著、上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社、１９９６、ｐｐ24－26

「光の絵を描こう」
懐中電灯を活用したグループワーク

「くじらくんプロジェクト」
ポリ袋を活用した共同制作

「巨大ハウスで遊ぼう」
カラーポリ袋を活用した共同制作

「新聞紙で覆っちゃおう」
新聞紙を活用した造形あそび

あとがき

二〇二〇年度最初の機関紙をお届けしました。表紙の機関紙タイトル「幼年美術」の下には大きく「６０９」と印字されています。一九六三（昭和三八）年の創設以来、五七年という年月の間、当初は年間一二回、途中から一〇回そして八回の発刊で六〇九号となりました。長年に渡り、多くの先生方の実践紹介を中心とした機関紙「幼年美術」は、六〇九号をもって最終号となります。長年のご愛読をいただき、有難うございました。

これだけのご案内で終わってしまいますと、何とも消極的、侘しい気分のままとなりますが、新たなツールでの展開に舵をきることとなります。既に運営委員の先生方からお聞きの方もいらっしゃると思いますが、来る六月より、全国幼年美術の会のホームページを開設することとなりました。こちらでは、様々な情報発信を随時行い、夏季大学等への参加申込みもウェブ上で可能となります。更に全国幼美と同様に、各地の地区幼美の活動紹介や研修会への参加申込みも可能となります。又、今日まで刊行した機関紙のアーカイブ化を進めてまいります。そして、情報発信のしっぱなしではなく、質問等のやり取りも可能となります。他の関係団体・機関・学会等とへのアクセスや情報入手も可能となり、様々なご縁づくりの場として、大いにご活用願います。

しかしながら、年度初めのしかも六〇九号と、何とも中途半端な数字での終焉には、いささかの戸惑いもありますし、今日まで本紙にお力添えをいただいてきた諸先輩方には、大変申し訳のない思いで一杯です。とてもこの紙面では言い尽くせませんが、時代の流れとは言え、斯様な措置に至ったことをお詫び申しますと共に、今日までのご支援に御礼を申しあげます。又、最後になりますが、長年、本紙の美しいデザイン・印刷を請け負っていただいた章美プリントさまには、本当にお世話になり、有難うございました。

今後の「幼年美術の会」の更なる飛躍とその深化に向けたスタートへの強い思いを込めて、最後の「あとがき」といたします。

（編集担当　羽溪）